

頭脳循環を活性化する若手研究者派遣プログラム
フランス領ポリネシア（タヒチ）出張報告（平成23年7月18日～7月25日）

出張者： 梶 茂樹（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授）

出張期間： 2011年7月18日～25日

出張先： フランス領ポリネシア（タヒチ）

出張報告： 7月18日から25日まで、タヒチに出張した。この目的は以下の3つであった。

- 1) 現在、若手研究者として現地に派遣されている西本希呼氏の研究状況を視察し、場合によっては助言を与えること。
- 2) 現地の研究者とコンタクトを取り、このプログラムの円滑な運営を図ること。
- 3) 以上と関連して、私自身の研究の幅を広げ、また深化させること。

以下、順に書いていく。まず 1)の西本氏の研究状況に関してであるが、西本氏は6月15日に関空を立ってニュージーランドのオークランド経由でタヒチに入っている。日本からタヒチに行くには幾つかの経路があり、私は成田からエール・タヒチ・ヌイの直行便でタヒチの首都パペーテへ飛んだ。

タヒチは正式にはフランス領ポリネシアである。全部で118の島があり、大きくソシエテ諸島、ツアモツ諸島、ガンビエ諸島、オーストラル諸島（ツブアイ諸島）、マルキーズ諸島（マルケサス諸島）の5つの諸島から構成される。タヒチ島はソシエテ諸島にある。首都はタヒチ島にあるパペーテである。パペーテにはタヒチの全人口26万人の約1割が住んでいる。

タヒチの住人は主としてポリネシア系であるが、フランス系も多く約12%いると言われている。また混血も多い。さらに中国系も約5%おり目立つ存在である。市場で売っている弁当やトラックを改造した屋台で売っている食べ物はそのほとんどが中華系であった。

タヒチの言語はタヒチ語である。これはポリネシア系であるが、広くはオーストネシア語族に属し、西本氏が博士論文で記述したマダガスカル言語と系統的に繋がっている。マダガスカル言語と一見して分かるほど似ている単語も少なくない。タヒチではタヒチ語が優勢ではあるが、フランス語もタヒチ語と並んで公用語の地位にある。パペーテで聞いているとタヒチ語にフランス語を混ぜて使う人が結構多い。またフランス語のみで会話しているポリネシア系も見かける。西本氏は当初タヒチ島でタヒチ語の調査を予定していたが、タヒチ島では私のウガンダでの調査に倣い、社会言語学的調査を主とし、記述言語学調査はオーストラル諸島のルルツ島で行うこととした。ルルツ島はタヒチ島の南664キロにあり、フランスの影響も少ない。

2)の現地研究者とコンタクトに関しては、ポリネシア大学の研究者とのコンタクトを考え、前もって文化人類学者の Serge Dunis 教授らとメールで情報交換を行った。ただ、

現地ではポリネシア大学は夏期休暇中で面会はできなかった。しかし他の研究機関では有益な話し合いが持て、貴重な情報も得られた。

まず芸術院では、副院長の Frédéric Cibard 氏に出会った。Cibard 氏は極めて気さくな人で、ここから人間関係が大きく広がった。文化学院の館長 Heremoana Maamaatuaiahutapu 氏を紹介していただき、また、日本の京都大学からすごい学者が来ているから、と多くの人にメールを出してくださったのである。タヒチでの文化関係の研究機関をまとめておくと以下のようなものである（代表者のわかるものは書いておいた）。

- 1) ポリネシア大学 (Université de la Polynésie Française)
<http://www.upf.pf/>
文化人類学：Serge Dunis、言語学：Louise Peltzer
- 2) タヒチ博物館 (Musée de Tahiti et des Iles)
<http://www.museetahiti.pf/>
館長：Jean-Marc Pambrun
- 3) 文化学院 (Maison de la Culture)
<http://www.maisondelaculture.pf/>
館長：Heremoana Maamaatuaiahutapu
- 4) 音楽院 (Conservatoire Artistique de Polynésie Française)
<http://www.conservatoire.pf/>
院長：Roger Taae、副院長：Frédéric Cibard
- 5) 文化・遺産局 (Service de la Culture et du Patrimoine)
<http://www.culture-patrimoine.pf/spip.php?article78&lang=fr>
局長：Teddy Tehei
- 6) 芸術院 (Centre des Métier d'Art)
<http://www.cma.pf/wp2011/>
- 7) 映像研究所 (Institut de Communication Audiovisuelle)
<http://www.ica.pf/>

3)の私自身の研究に関しては、本来ここで述べるわけにはいかないが、2)のコンタクトにも関係したので、太鼓の部分だけを述べる。10年以上前であるが、ハワイのホノルルに行った折、木彫りの大きな太鼓を見た。姿形がアフリカのメッセージ伝達用太鼓にそっくりであったので解説を見たところ、タヒチのものである旨書かれていた。その時以来“タヒチ”が私の脳裏に深く刻み込まれたのであった。従って、今回タヒチに行くにあたっては是非ともこの太鼓を見たいと思っていた。

現地では民芸品店にも売ってはいたが、どれもこれも小さいものばかりであった。そこで“音楽”なら音楽院だと言ってくれる人がいて、音楽院へ行ったというわけであっ

た。Frédéric Cibard氏によれば、音楽院では太鼓の叩き方を習うコースもあるということであったが、研究なら文化学院館長のHeremoana Maamaatuaiahutapu氏がいいということなので文化学院に出向いた。そして、ちょうど運よく館長のHeremoana Maamaatuaiahutapu氏にお会いでき、太鼓について有益な情報を得ることができた。

彼によれば大きなものはクック諸島かフィジーのもので、タヒチのものは全部小さいということであった。長さは長いものでは70~80cmあるが、直径は太いものでもせいぜい20cmで、1m近くあるアフリカのものとは大きく異なる。この太鼓をタヒチ語でto?ereという。材質は黒檀のような硬くて重い木で、タヒチ語でmiroと呼んでいる（フランス語ではbois de roseと言う）。またtouと呼ばれる木も用いるようである。

形状は、アフリカのもののように中をくり抜いてはいるが、割れ目のどちら側を叩いても同じ音がする。ポリネシアの言語はアフリカの言語のように声調言語ではないのだ。叩く時は、これを通常地面に立ててバチを1本持って片手で叩く。材質が固く、物が小さい分、甲高い音がする。ポリネシアの踊りは女性の強烈な腰振りが特徴的であるが、その腰振りの甲高いリズムを刻むのがこのto?ereである。かつては人が死んだ時これで知らせていたと言うが、今はもっぱらダンスのリズムを刻むのに用いられる。同じようなタイプであるが、縦置きではなく、台の上に横向きに寝かせて2本のバチで叩くものもある。これはto?ere pitiというが、あまり見かけることはない。



写真1 タヒチの首都パペーテの市街



写真2 ポリネシア大学の建物



写真3 民芸品店で売られている太鼓 toere